



日本及世界經濟の現勢

津村, 秀松

(Citation)

国民経済雑誌, 50(6):849-895

(Issue Date)

1931-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00054332>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00054332>



日本及世界經濟の現勢

津 村 秀 松

目 次

- 一、借金政策の行詰
- 二、金解禁の功罪
- 三、世界的不景氣の襲來
- 四、對米戰債と賠償金の嚮來
- 五、公債及租稅の激増と物價
- 六、金の偏在と銀の暴落
- 七、支那印度の内亂とロシア
- 八、世界的關稅戰爭の開始
- 九、アメリカの財界の恐慌
- 一〇、マルキシストの不景氣觀
- 一一、金融資本の増長と國家
- 一二、金解禁と正貨流出及物價
- 一三、低物價政策に對する批判
- 一四、全産業及貿易の一大沈衰
- 一五、財政難と政策動搖の危險
- 一六、政局不安に基く財界不安

一、借金政策の行詰

今や我日本を初め全世界は前代未聞の不景氣に陥つてゐる。日本の不景氣は過去の——大正九年殊に大正十三年以來の——放漫政策の跡始末だ。世界の不景氣は過ぐる歐洲大戰

の跡始末だ。日本も亦世界の一國であり、參戰國の一つであつたから、世界共通の不景氣の影響を受けつゝある以外に、日本特有の不景氣の影響を受くるといふ、謂はゞ二重の打撃を受けつゝあるものだ。

話の順序として、先づ日本特有の不景氣の原因を吟味しやう。それは云ふ迄もなく過去の放漫政策で、其主なるものは、第一に積極政策の附景氣である。一層的確に云へば、政友會内閣の借金政治の附景氣であつた。この爲めに、中央及地方財政が非常に膨脹して、借金の元利金が著しく増加した。國債六十億圓(一人當り約九十五圓)地方債二十億圓、合計八十億圓(一人當り約百三十圓)其利拂丈けでも、年額四億圓以上といふ恐しい負債となつた。

此内には諸外國に對する借金即ち外債も少くない。歐洲戰爭前には、我國全體の外債——民間の外債をも入れて——十九億圓で、内外に保有の正貨が三億五千萬圓であつたが、此戰爭に際して得た利益で、戦後の大正九年には、外債十六億圓に減じ、保有の正貨は二十二億圓に上つた。それが今では全く反對になつて、外債が二十二億圓、正貨が僅に八億圓となつた。

尤も政府丈けが借金政策を繰返したのならば、我國全體の世帯としては大した事にならな
いが、上の爲すところ下皆之に倣ふで、民間の諸會社銀行も皆浮き調子になつて、經營が放漫
なり、無暗に積極方針を採り、借金をしては借金を返し、蝸配當して株價を釣上ぐるといふ遣方

に出でたものだから、茲に公私經濟共に次第に借金に深みに陥ちて入つたのだ。

過去の放漫政策の第二は金の輸出不解禁である。戦後對外爲替相場が回復して、平價に近づいたこと一二回あつたが、あの時機に金の解禁をやつて居れば、積極政策もあれ程までに行き過ぎなかつたであらう。イヤ之をやつて居れば、あの時代の政友會内閣も恐くは借金政治の附景氣を繰返し得なかつたと思ふ。切言すると、政友會はその傳統的政治の方針であるところの積極政策——借金政治の附景氣——を繰返したいばかりに、必要な政務と知り乍らも、殊更ら金の解禁を怠つたのだとも云へる。

我國は歐洲戰爭の半ば頃即ち大正六年九月に英米等と相前後して、金の輸出を禁止した。

大正八年六月戰爭が終つた。米國は直ぐ其の七月に、英國は少し遅れたが、それでも大正十四年に、その他の國も、今から四年乃至六年前に、大抵金の輸出禁止を解いた。それなのに同じ參戰國の一つたる我國のみが金解禁をやらない。そこで出る可き金が出ない、減る可き正貨が減らない。インフレーションをやるには、誠に好都合である。通貨は膨脹する一方だ。物價は騰貴する一方だ。景氣は此上もなく宜い。然しそれは云ふ迄もなく一切附景氣だ。附景氣だから、貿易はあくまでも入超た。入超だから、國際收支の差引勘定は常に支拂超過だ。此跡始末はいくら金輸出禁止でも、外國に於て正貨を以て支拂ねばならぬから、之が爲に新に借

金(即ち外債)しては代金を拂ひ、後には借金新債をしては借金舊債を拂ひ、借金の利子を拂ふといつた調子になつた。それが積り積つて前に言ふ外債の激増となつたのだ。

借金をすれば結局その身の破滅だ、借金をすれば仕舞には首が廻らなくなる。之は個人の場合でも、國家の場合でも同じ事だ。「經濟國難」などいふ悲鳴が此時分から國中に普く響いてきた。

二、金解禁の功罪

かゝる際に、昭和四年七月二日内閣の交代があつて、民政黨の濱口内閣が成立した。そして政策の一變を宣言した。

第一、金の輸出解禁

第二、消費節約宣傳

第三、財政緊縮方針

の三大政策が即ちそれだ。

金解禁は昭和四年十一月二十一日に宣言されて翌五年一月十一日に斷行された。大正六年九月禁止後實に十三年目である。茲に一つの議論がある。それは今日の我國の不景氣は全くこの金解禁に原因するといふ議論だ。然しそれは間違だ。金の解禁が今日の不景氣の

原因でなくて、不解禁が原因だ。前にも云ふ通り、放漫政策をやるには、解禁しては都合が悪い爲めに、屢解禁の時機を逸し、解禁の方法——新平價解禁といふ——も考へず、それが重りくゝて漸く解禁したものだから、遅れ切つた解禁の結果が財界に一大衝動を起したのだ。

歐洲大戰後の我國は、戰爭中の喰過ぎで劇しい大腸カタルを起した。之を治すには、第一には早く下劑金解禁をかけて、腸の中の汚物を一掃すること、第二にはその後暫く絶食療法緊縮政策を採ることのこの二つが、唯一無二の根本療法であつた。それなのに、それをやらないで、反對に、永らく下痢止め(金輸出不解禁をやつた。そしてその上に益暴飲暴食積極政策)をやるといふ不養生(放漫政策)を重ねたものだから、その結果は腹部が無暗に膨脹した。顔面が次第に紅漲した(附景氣又は所謂中間景氣)。外觀は如何にも肥大したる健康體のやうに見えるが、之れが爲めに遂に病人はいよゝゝ糞詰り(經濟財政の行詰)になつて、動けない歩けない重體に陥つた(經濟國難財政國難)。之を治療するには、第一には先づ下劑をかけること、即ち金の解禁だ、第二には暫く減食を斷行させること(即ち緊縮政策の斷行)だ。之れには大分の苦痛を伴ふが、之れより外に療法がない。濱口内閣はこの二つの療法を斷行したのだから、財界に盛んなる下痢を起した(株式及諸物價の暴落、會社銀行の破綻等、都鄙到るところ民に菜色あるに至つた)痛烈なる現時の不景氣)——が、現時の不景氣(病中の苦悶及病後の昏睡狀態)は、既に此病氣

に罹たからには、全く止むを得ない成行だ。だから、金解禁(下廻)が病氣(不景氣)の原因でない。その療法だ。金不解禁(下廻止め)がこの病氣(不景氣)の唯一とは言はぬが一つの大きな原因を爲して居つたのだ。

然し乍ら茲に一つ考へさせらるゝ事がある。それは金解禁其物は決して悪くない、然し我國は戦後の金解禁の時機を屢々逸した爲めに、遂に昭和五年一月十一日に至て漸く解禁したのであるが、その時には早や既に歐洲戦争に基く深刻なる世界の不景氣が此國にまでも押し寄せてきた。一月に解禁して翌二月には之が分り出した。之がもう一と月か二た月早くに分つて居つたならば、濱口内閣は昭和四年十一月に金解禁の宣言を躊躇したであらうし、恐くは井上藏相自身も亦昭和五年一月に之が斷行の臍を固め得なかつたであらうといふことだ。もう一つ言ふ可きことがある。それは濱口内閣井上藏相が金解禁を斷行するに方つて、世界的不景氣の影響の斯くまで激しいものあることを豫知しなかつたことだ。一層正確にいふと、我財界に及す世界的不景氣の影響の斯くまで激しいものあるを知らなかつたといふよりも、世界的不景氣そのものが斯くまで激しいものとなる可きを知らなかつたことだ。之は當時實際世界の——又我國の何人も豫想し得なかつたところだと強辯してゐるやうだが、此事は此際に新平價解禁に思ひを致さなかつたことと共に、金解禁を斷行するに方つての適當な

る準備用意を缺いて居つたといふ政友會一流の批難を此意味に解すれば、井上藏相と雖も恐くは辯解の辭がなからう。此二つ共に今は總て過ぎ去つたことだが、金解禁の功罪を批判する上からは、不問に附する譯には行かぬ。

三、世界的不景氣の襲來

そこで研究の問題が暫く我が日本を離れて、世界的不景氣の襲來と、その原因といふことに移る。

世界的不景氣は前々から我國の財政金融及貿易の上に感知せられてゐたのだが、それが深刻に痛切に感知せられたのは、正しく昨年の二月頃からだ。そしてそれが時を同しうした我國の金解禁と相待つて、我國の經濟難局の外部的原因となつた。

云ふまでもなく、この世界的不景氣は歐洲大戰の總勘定だ。戰爭の跡始末の總決算が茲に前代未聞の一大不景氣となつて世界の表面に凝結したのだ。前後約五箇年の永きに亘つた世界戰爭は幾千萬の壯丁を生産方面から奪ひ去つて消費一途に走らしめた丈でも残りの生産力に對する異常の需要が起るのは當然であるのに、尙ほ其上に直接戰爭に要する兵器彈藥等の生産力及之が輸送上の勞力に對する需要が一時に莫大なる高になつた。ところがそれが戰爭の休止平和の回復と共に一時に全く消滅し去つたといふことが、既に絶大なる需

給の攪亂を齎らした。尤も戦後も當分の内は各國の復舊事業其他で生産に伴ふ消費力の維持を見たが、各國の秩序回復すると共に、一般の消費はいよ／＼戦前の普通状態に立ち返つたから、戦時及戦後の科學の進歩で俄に大膨脹を遂げた各方面の生産は著しい過剰生産を現はさずには濟まぬことになつた。之が今日の世界的大不景氣の大體の原因である。

四、對米戰債と賠償金の惱み

然し乍ら此大體論を外にして、尙ほ世界的大不景氣の原因が種々ある。之を一々内譯してゆくと、先づ第一が戰勝國の戰債内外借入金と戰敗國の償金といふ二つの支拂の惱みだ。現在に於てアメリカの對歐戰債が百十六億弗、此内譯がイギリス四十四億弗、フランス三十八億弗、イタリ二十億弗で、其他の歐洲諸國舊聯合國も亦皆此戰債を負てゐる。此外に是等歐洲大陸諸國はイギリスに對しても巨額の戰債を負てゐる。その一方に、ドイツは是等の諸國に巨額の償金(ベルサイユ平和條約締結當時)を支拂はねばならぬ。此支拂がドーズ案(一九二四年三月十七日の賠償委員會で決定)では二十五億マルクづゝの年賦拂と決つたが、それが實行出來ないので、一九二九年のヤング案(ヤング案は一九二九年八月六日から三十一日に亘る第一回ヘーグ平和會議で大體が成立し細目は翌年一月三日から二十日に亘る第二回ヘーグ會議で決定した)と改つて、最初の内は十七億マルクづゝの年賦拂(年賦は一九二九年乃至三〇年を第一年とし一年賦で、此内最初の三十七年間は平均すると一箇年十九億八千八百八十萬マルク即ち)約二十億マルク(約二十億マルク)の年賦拂で、其後の二十二年間は平均約十六億マルク(約十六億マルク)の年賦拂となる)但し此内最

初の内の年賦金平均額約二十億マルクはドイツの都合で六億六千萬マルク迄は軽減して、殘額は二箇年限り支拂を延期するとまで緩和したが、それでも尙ほドイツの支拂が滯滯勝で、今日までに支拂つた高が、約百億マルクに過ぎぬ。そうしてゐる内にドイツは此不景氣で物價は暴落する、品物が頓と賣れない、収入が著しく減つた、此上アメリカからの借金も出來ぬ、そこでヤング案による年賦支拂の第二年目を終らぬ内にハタと行詰つた。それだと云つて、ドイツからの償金を取らずに戰債のみをアメリカに支拂ては、歐洲諸國は立ち行かぬ(ヤング案で支拂ふ年賦金が直接各國に支拂ふ賠償金と、各國の對米戰債に振替る分と初から二部に分れてゐる)。それもその筈である。一口に百十六億弗の借金といふが昨年末の日本全國の銀行(日本銀行も入れて)の預金が合計百十五億圓で、貸出が合計百十二億圓だから此二口を合した金高よりも尙ほ多いといふ大借金では、如何なヨーロッパでも持ちあぐむに無理がない。之を此儘にしておくと、此不景氣は何時迄も回復しないといふので、アメリカが戰債を捧引きにするか、減額するか、支拂猶豫するか、それともドイツの支拂ふ償金及イギリスに對する大陸諸國の戰債を肩代りするか、此内何れかをアメリカが承諾せねば、この世界的不景氣は何時までも續くし、又それはヨーロッパ限りでの事でなく、アメリカ自身の不景氣も決して一掃されるものでないといふ議論が、再び頭をもち上げてきた。之はアメリカの農工業が内地市場を主たる目的地とした時代は歐洲戰爭を境目として既に

早くも過ぎ去つて、普く世界の市場就中ヨーロッパを第一の市場とせねばならぬ時代に踏み込んでゐるのに、そのヨーロッパが戦後になつてアメリカに對し巨額の戦債を支拂はねばならぬとか、又ドイツは年々巨額の賠償金を支拂はねばならぬとかといふことが、近年激増し來つたアメリカの海外放資に對する元利金の徴收以外に、儼然と存するといふことではその上に更に、國際收支の決算上差引支拂超過を起す基になるところのアメリカ商品の買入は、如何なヨーロッパも到底續けてやれぬ譯となつたからだ。即ちヨーロッパ諸國はアメリカに對し巨額の金を支拂ふことと、巨額の商品を買入たることとを、同時に爲し遂げ得ないからだ。そこでアメリカはヨーロッパ諸國——ドイツをも入れて——に對して元利金(戦債及償金とも)の支拂を猶豫してやるか、それとも農産物を始めアメリカの製造工業品のヨーロッパ輸出を斷念するか、孰れか其の一つを選ばねばならぬ羽目になつた。一九二九年末以來のアメリカの恐慌と不景氣は全くこの羽目から起つてきたものだ。

五、公債及租税の激増と物價

世界的大不景氣の第二の原因は、歐洲諸國の公債の激増と租税の増徴だ。足かけ五年に亘つて、あれだけの大戦争をやつたのだから、戦時の支出及戦後の經營として、公債が激發された、各種の租税も亦増徴されたことは、容易に豫想される。現今日本の政府は借金に苦しんでゐ

る、國民亦租税に苦しんでゐる——が、それで之を日本國民の頭割りにすると、國債が九十五圓先づザツト百圓であるのに、アメリカは三百圓、イギリスは千六百圓、フランスは五百五十圓といふところだ。租税は日本が頭割り十五圓であるに對して、アメリカは六十圓、イギリスは百五十圓、フランスは七十五圓といふ、到底比較にも何にもならぬのだ。それに近頃はこの不景氣の爲めに失業者が非常な勢で毎月増加してくる。世界全體で二千萬人（一九三一年二月國
際労働局調査表）の失業者だが、此内ヨーロッパだけで一千一百萬人、一年前に比べると既に二倍以上になつてゐるといふ。失業者が此のやうな數字に殖へてゆくものだから、イギリスでもドイツでも失業保險に對する國庫の支出が激増してきた。之れ丈けでも是等の國の財政が立ち行かぬと謂はれてゐる。然し乍らいくら金がかゝつても、一旦定めた制度であるからには、入る丈けの金は取り立てねばならぬ。そこでありとあらゆる租税の誅求となるから、自然有産階級の負擔が非常に重くなる。資本家や事業家が其收益の大部分を吸收される。そこで諸事業が自から沈衰する。又有數なる富豪が國籍を他に移したり、自國の有價證券を賣放つて他國の有價證券に乗り代へるから、茲に期せずして盛んなる資本脱走が行はれ出した。之が更に各國の企業資本の缺乏による諸事業の沈衰を齎らした。事が是れ丈けに止るならば、また宜しいが諸事業が打ち連れて沈衰を見るといふことは、結局國庫の收入の著しい減少を伴ふもので

あるから、それが再び元に返つて更に財政困難の基となつた。

そこで戦後のヨーロッパ諸國は、他の方面でウント財政を整理し、緊縮方針を採らねばならぬことになつた。又それと同時に、一般經濟界に對しても、戦時に異常に膨脹した通貨を縮少して、物價を戦前のところ迄引き下げねばならぬことになつた。之が又この世界的不景氣を甚しからしめた第三の原因となつた。

六、金の偏在と銀の暴落

然し乍らそれにも増して此世界的不景氣を醸した大きな原因は、第四の金の偏在と銀の暴落といふことだ。

歐洲大戰の結果として、國際貸借關係及國際收支勘定に著しい變動を起した。言ひ換れば世界の債權國債務國の番附が大に變つた。それが爲めに年々の世界の金の流るゝ方向も亦變つてきて、最近數年間に急激に世界の金の大部分がアメリカとフランスの二國に集中することになつた。現今世界にある金(金準備の分量は約二百二十億圓だが、その約半分は九十億圓がアメリカに集り、残り半分の半分即ち五十億圓がフランスに在るといふ有様になつた。即ち世界の黄金の約四分の三が二國に集て、其他の五十餘國が残りの四分の一を分け取りしてゐるといふ勘定だ。金が貴いのでなく、金で買へる物が貴いのであるから、金が諸國の間に

適當に分配されてゐると、道理を離れての金の爭奪戰も起らぬが今日のやうに金の大部分が一二の國にのみ偏在することになると、自餘の國々での金の限界效用が著しく嵩るから、之が奪ひ合に常規を逸する。即ち重金主義の弊が追々著しくなる。又金が無暗に高くなるといふことは、同時にその他の物資が無暗に安くなるといふことであるから、これ丈けでも諸國の物價が法外なる下落を演ずることになつた。殊に我國では、このやうな金の爭奪戰の眞最中に、それほどのこととは知らずに金解禁をやつたものだから、三億圓以上の正貨の流出といふ豫想外の打撃を受けたことは、否定する譯に行かぬ。

それも一時の現象なれば宜いが、アメリカの金の吸收力は實に偉大なるものがある。大體の數字から云ふと、現今アメリカの對外放資額が約百五十億圓、對歐戰債が約百二十億圓、この二つでアメリカの對外債權が約二百七十億圓に上る。その上に年々の輸出超過が十六億圓で、年々の正貨の入超が十億圓と稱せらるゝ。それなのに、このアメリカが世界の殊に歐洲の財界の不安を感じて、一昨年から昨年にかけて、對外放資を差し控ゆる一方、盛にこれが回収に取りかゝつたものだから、世界の——殊に歐洲の購買力は著しく萎縮した。そして其結果アメリカ自身の大不景氣を齎す原因ともなつた。此後アメリカがその方針を改めて、世界に金の分布對外放資をやらなければ、この世界の大不景氣は何時までも回復しないといふ議論が、ア

メリカ自國內にすら唱へられてゐる。世界の金利(中央銀行の)は、アメリカが一分半、フランスが二分で、其他の國ではイギリスの三分を最低として、我國及ドイツが五分、その他に一割の國さへあるといふ事實が、金の偏在の一證で、同時に國際金融の梗塞を證明するものである。

金の偏在だけならば、まだしも宜いのであるが、之と前後して、昨年(一九二〇年)の二月以來、銀の暴落が起つてきた。大體銀の相場は二十四ペンスといふのが是迄の常態であつた。ところが、昨年(一九二〇年)の年頭に二十ペンスに下り、二月からは暴落を始めて、六月には十五ペンス、十二月末には十四ペンス半、更に本年に入つては二月に十二ペンス臺をも割らんとする未曾有の暴落となつた。これでは銀一匁が金七錢以下で、銀の値打ちが半分以下になつたのだから、支那や印度の購買力は著しく萎縮した。昨年(一九二〇年)の我國の對支輸出が前年に比し三割減で、綿糸綿布の如きは五割以上の減少であることの一半は、この銀安に原因する。

一體この銀の最近の一大暴落は何から來てゐるのであるか。之を詮議して見るといふと、最初の内は、

一、世界の金の産額は年々減つてきてゐるのに、反對に、銀の産額は年々増してきた、而も銀は金と違つて銅其他の鑛物の副産物として採取さるゝことと少くはないから、相場が下つても、之が生産制限を爲す力が弱いといふこと。

二、金本位國に於ける補助銀貨の純分が近頃になつて著しく減少され出した一方に、印度が金爲替本位制に移り、支那が又金本位に移る準備に着手し出したといふこと。

三、金から見れば、銀も亦一般の物資と同じであるから、一般の物價と同じやうに、金の騰貴の影響を受けたこと。

などいふことに由來したのだと思ふ。斯様に銀價が下落又下落を重ねることになると、値打ちの薄い銀を貴金屬として裝飾に用ゐるやうとする觀念も次第に薄らぐ道理であるし、殊に底抜けの銀を家重代の財産として保有する習慣に就ての危険性が著しく加つてきたものだから、支那や印度の人民が是迄のやうに銀を吸收するどころか、反對に盛に銀を吐き出すやうになつたことが、最近には銀の暴落の原因となり又結果となつて、いよいよ急激なる銀價の下落を見るに至つたのだ。

由來支那の銀の吸收高は、年々一億三千八百萬オンス、印度は年々八千二百萬オンス、合計二億二千萬オンスである。之に對して世界の銀の年産額が約二億五千萬オンスと云ふから、世界の産銀の九割までは、支那印度に消化されたのだ。それが是迄のやうに需要せない、又歡迎せないのみならず、現在支那に保有さるゝ銀の分量が三十億オンス、印度が四十億オンスといふことであるから、之が兩國の内地から追々吐き出さるゝことになる、銀價の回復は到底見

込なきものと謂はねばならぬ。又銀には此上の下落がないとしても、支那と印度の人口は合計七億五千萬人で、世界の人口の約半分を占めてゐるといふ事實と、其人口が今尙ほ約七十億オンスの銀を保有してゐるといふ事實と、その銀が今日の相場で既に半値になつてゐるといふ事實と、この三つの事實を綜合して考へて見ると、世界の市場に於ける購買力(消費力)が之れ丈けでも非常に減退したことを想像するに難くない。

七、支那印度の内亂とロシヤ

支那と印度には、銀の暴落以外に、今一つ世界的不景氣を起した事件があつた。それは近頃は等の兩國に打ち續くところの内亂と、それに基くところの國民の疲弊といふことだ。然し之は直接には世界の市場に對してといふよりも、専ら日本を初め東洋の市場とイギリスに關するものだから、支那印度の銀の話に次で、茲に書き加へておくに止むる。

之に較ぶると、稍大きな事件は、ロシヤの共產國化と其世界市場に對する脅威といふことだ。ロシヤの共產國化といふことは、世界から見れば、最初の内は純然たる政治問題であつた。世界の各國はロシヤ自身が其國の都合で共產國になつたことは致し方ないとして、唯其各國に對する赤化運動を恐れ、之れをのみ警戒してゐた。ところが、其赤化運動が近頃政治的赤化運動から經濟的赤化運動に鋭鋒を改め出すに至つて、各國は少からず面喰つた。勞農政府の所

謂生産五箇年計畫なるものが追々進んで行くに連れて、小麥、砂糖、材木、粗布其他の國産品を多量に且つ廉價に生産して、ヨーロッパは申すに及ばず、アメリカや印度、南洋にまでも盛にダンピングを試みるので、世界の市場は此亂暴狼藉によつて、屢々攪亂されることになつた。然し之も今の程度ならば、現在の世界的不景氣の一原因を爲すといふ迄のものでない。

八、世界的關稅戰爭の開始

各國周圍の事情が斯様に窮迫してきた矢先きに、世界的關稅戰爭が開始されたことが更に第五の世界的不景氣の原因となつた。

歐洲大戰後の各國は戰後の財政を整理する必要と戰後の經營に當る必要からして、何れも歳入増加の必要に迫られたことは、曩に述べた如くである。そこで主として外國輸入品から徴收する爲めに國民の誰れしもが異存の少い關稅が眞先きに多く増徴さるゝに至つたのは、勢の然らしむるところであるが、之を外にして、第一には、ヴェルサーユ平和條約に民族自決の一項が加つて、戰後の歐洲大陸が四分五裂され、群小諸國が簇生したことによる關稅の墻壁の増加、第二には是等の交戰國が戰爭中自給自立の必要に迫られて無理やりに興した産業や、又は戰爭中それ等の産業に従事して居つたところの勞働者の高い賃銀其他の勞働條件の向上を戰後外國輸入品の競争に壓倒されないやうに保護してやる必要、第三には此種以外の産業

及國家に於ても亦一般に經濟上及軍事上の理由による國產獎勵熱の勃興等が原因となつて、著しく國際間の自由通商を阻害することになつた。更に又之が反動の原因となつて、各國間に報復的に關稅を引上ぐるといふ行動と、親近國家間に經濟的提携を圖るといふ運動とが、次から次へと競争的に起つてきた。

この世界的關稅戰爭に新に一大刺戟を興へたものは、確にアメリカの新關稅法の制定であつた。此法案が大統領フーヴァの裁可によつて效力を生じたのは、昨年六月十八日であるが、議會に提出されたのは、それより一年二箇月も前の一昨年四月の特別議會であつた。此間に初めは農業保護の趣旨であつたものが、工業保護にまでも保護の範圍を擴大したのみか、平均二割の増徴となつたが爲に、アメリカ建國以來の最高關稅制度が出来上つた。そこで先づ第一番に之に對する報復的關稅引上を行ふに至つたのは、隣國のカナダであつた。カナダは此國に對するアメリカの輸入が一箇年約五億圓を減するであらうといふ對米關稅の増徴を斷行した。最近イギリスを初めヨーロッパの諸國の間に、關稅政策上の合縱連衡説が勢を加へたのも、亦このアメリカの刺戟によるものであらう。

近年イギリスの對外貿易が著しく不振になつた。之は世界を風靡する經濟界の不況にもよるのであるが、此國の貿易の不振は今に始つたことでないものだから、歐洲大戰後の各國の

排他的關稅政策の影響も亦少からず存在するといふ見地から、イギリスは一日も早く其傳統的自由貿易主義を捨てて、適度の國產保護の墻壁の内に、此國の諸殖民地を抱擁するところの一大英帝國を建設す可しといふジョセフ・チャンペレンの一九〇三年以來の特惠關稅說即ち大英帝國內の自由貿易主義が、急に頭を擡てきた。最初には保守黨のビーヴァブルックとロザミアの兩卿が之を主張した。帝國黨なる新政黨が之が爲に發生した。昨年七月には此趣旨が全國銀行大會の決議となつて現はれた。更に同年の九月にはノツチンガムに於けるイギリス勞働組合年次大會で、

若し世界各國民がそれぞれ經濟的墻壁を造らうとするなら、イギリスとしては之を大英帝國の周圍に造るのが、最も實際的方法だと思ふ云々

といふ一報告を多數を以て可決した。時世時節とはいへ、イギリスの勞働組合が從來各國勞働組合共通の信義であつたところの國際主義を捨て、翻然として帝國主義に走つたといふことは、少からず世界の耳目を聳動した。又勞働組合の意見が必ずしも勞働黨の意見になり得るとは限らないが、勞働黨も亦幾分此意見に傾聽せざるを得ぬ。本年三月兼て噂のあつた通り勞働黨のモズレー一派が遂に脫黨して新政黨を組織した。そしてその黨綱の一つに、諸自治領との間に互惠的關稅制度を樹立す可きことを掲げてゐるのは、這般の消息を齎すもの

ではあるまいか。して見ると、此國に於ける多年の傳統に對する反動思想が、是迄のやうに保守黨の一角に限らず、自由黨が既に産業の國家的統制の必要を唱へたに加て、漸次全政黨の上に強き力を及さむとする事實を否定することが出來ぬ。

イギリスの繁榮は世界の消費の上に立て居るのだといふことは、古い歴史であるが、今やアメリカは漸くその後を追はんとしてゐる。アメリカの商工業がアメリカ内地の消費者を華客とする時代は既に過ぎ去つた。そこでアメリカ産業が是迄通りの繁榮を維持しやうとするには、是迄よりも一層外國の歡心を買はねばならぬ事情にある。それなのに、アメリカが動もすれば之に反對の行動に出でんとするのは、果して此國全體の利益に一致するであらうか、之は頗る疑問だといふ風に解する議論が、アメリカの新關稅法制定當時盛であつた。果然同法制定と前後してヨーロッパの一角にこの反動が起つた。それは、フランスの外相ブリアンの提唱にかゝる歐洲經濟聯盟の動議（ブリアンは一九二九年九月五日の第十回國際聯盟總會で國際聯盟總會でいよく此で）であつた。之は歐洲諸國が政治上では是迄通り別々の國であつても、經濟上では打つて一丸とならうといふのである。即ち聯盟以外の國に對しては高度の保護關稅といふ共同戰線を張る一方に、聯盟内の國境の關稅は之を撤廢若くは輕減しやうといふのだ。イギリスは曩に述べたやうな大英帝國主義から其諸殖民地を糾合して自分等で一

世界を造らうといふ意見が新に其勢力を盛り返してきたから、必ずしもこのブリアンの提議に参加しないかも知れぬが、その他のヨーロッパ諸國では、アメリカの經濟的侵入を恐るゝといふ共同の敵愾心から、相當の反響があつた。

之と幾分組織も方法も違ふが、近年ドイツの主唱によつて、製鐵石炭其他各種の産業の上には現はれきた國際カルテルと其カルテルによる海外に對する大仕掛のダンピングの流行も、此傾向の一つの現はれであつた。支那の關稅自主權の回復、印度の關稅の増徴なども、他に主たる原因ありとはいへ、亦この反動思想に負ふところ決して少くはない。何れにもせよ、歐州大戰後の世界は、世界的不景氣の深刻化と共に、西洋とは云はず、東洋とは限らず、皆當面の苦境を打開せむが爲に、或は單獨に、或は數國聯合して、國產保護獎勵の美名の下に、自給自足の排他的經濟政策を採用せしむとする一大傾向あることは、蓋ふ可からざる事實である。そして其傾向が排他的である爲に、互に自由通商を妨げ合ふて、相率て益世界的不景氣を深刻ならしめつゝあることも、亦否定するに由なき事實である。

九、アメリカの財界の恐慌

然し乍ら是等に比して遙に大きな事件は、アメリカの財界の恐慌であつた。之は正しく世界的不景氣の第六の原因として數ふ可きものだ。

歐洲大戰に際しての最大の戦争成金國はアメリカであつた。戦時戦後を通じてのその結果から云へば、アメリカのみが唯一無二の戦争成金國とも云へる。此戦争前には尙ほ債務國(借金國)であつた此アメリカが、戦時の利益で一躍債權國(貸金國)となつたのみか、戦後は戦債の内入れ、貸金の利子、盛なる出超の代金、歐洲財界不安による各國富豪の對米放資流行……等々の理由で、世界の資金(金貨)がアメリカに集中した。ニューヨークはロンドンに代て忽ち世界の金融の中心となつた。世界の生産及消費の一半は、此國に集つたと稱しても決して過言でない。世界の總生産額の内、棉花の六割、小麥の三割、石炭の四割五分、重油の七割、鐵及銅の五割五分は此國の生産だ。又世界の産する生糸の九割、護謨の七割、棉花の三割は此國の消費に待つといふ有様となつた。或人が此節はアメリカの一顰一笑が世界の經濟界の晴雨を決定すると言つた位である。

そのアメリカが現大統領フーヴァが選舉さるる頃まで、總ての産業も企業も皆此調子で繁榮と勃興の絶頂に達して居つた。それがフーヴァ就任後間もなき一昨年(一九一八年)の十月俄然調子が一變して、同月廿九日先づニューヨークのウォール街(株式市場)に未曾有の一大恐慌が起つた。僅か數日の内にニューヨーク株式取引所だけで二百四十の花形株が百六十億ドルの暴落を演じた。其後一時小康あつたが、昨年六月再び恐慌が起つて、諸株は前年に比して更に一層の

慘狀を呈した。之が基で爾來諸會社の倒産、大小銀行の閉鎖が、それからそれと引き續て今に至つてゐる。之が爲めに失業者の數も非常に殖て、無慮五百萬人に上ると言はれてゐる。

之は一體何に基くのであるか。今日までの知るところによると、それは戰時及戰後の好景氣に異常の大膨脹を遂げた此國の産業が、一朝世界的なる大不景氣の突撃を受けて、製品の販路杜絶、農産物の生産過剰となつたからだ。此國自慢の月賦販賣制度が收入の杜絶によつて根底から瓦解し始めた爲に、次から次へと信用制度を擾亂し、多數の銀行の破産を見るに至つたことも、此恐慌の一誘因であつた。又アメリカが其偉大なる財力に委せて世界の金貨を一手に吸收するのみで、世界市場を培養する資金の供給を怠つたのみか、自から新に關稅戰爭の種子を蒔いたことも、確に此恐慌從て又現時の世界的不景氣の一大原因を成してゐる。

一〇、マルキシストの不景氣觀

ところが、世のマルクス主義者はこの世界的不景氣の大混亂を眺めて、これは正しく資本主義經濟末期の當然の現象だ。資本主義生産の行詰の状態だ。資本主義も第三期に入ると、結局此狀態を以て崩壞に終るものと、頗る冷かなる批判を浴せかけてゐる。

もう少し詳しく彼等の批判を紹介すると——一體資本主義には恐慌が付き物だ、資本主義生産の發達と共に週期的に、一定の順序を経て、恐慌を繰返すものだ。それは資本主義には生

産限りの統制あつても、生産と消費とを並べての統制がない。唯資本能力の膨脹に委せ、機械や組織の完成に委せて、無暗に安く多く廣く生産を擴大してゆくのは宜いが、何等之に伴ふ消費の發達を顧慮しないから、結局資本主義的生産が發達すればするほど、消費との不釣合が甚しくなつて、一歩一歩恐慌に近くのである。又他の一面からいふと、資本主義の發達するといふことは、一般の社會に優勝劣敗弱肉強食が烈しく行はるることを意味するものであるから、中小企業が倒れて大企業のみ獨り榮えることになり、富の分配が極度に不平均となつて、世界及一國の人口の内容が極少數の富豪と無數の貧民とに分るることになるのであるから、資本主義的生産の發達の結果、如何程安く多く廣く生産するやうになつても、それだけの生産を消化することが出来なくなつて、總ての生産の一大過剩から、遂に世界的にも又國內的にも、一大不景氣を起すのだ。現在の世界的不景氣も亦全く此道程に基て起つたものだ。表面からのみ見ると、それは如何にも世界戦争の總勘定だと云へるが、その實は假令ひ過去に世界戦争が起らなくても、資本主義經濟の發達は自から茲に到達する。唯その運命の到達が、世界戦争の勃發といふことで、幾分早められた丈けのことだ——と、こう言ふのである。

マルクス主義者は更に此運命觀を論理化するに、ヘーゲルの辯證法を用てゐる。即ち總じて物(甲)が發達するに連れて、其物體の内に其物と全く反對の、從て全く矛盾の物(乙)が、自から發

生し、發達してゆく。そしてこの全く相反する二つ(甲と乙)が對立するまでになると、此度はその二つの矛盾が統一されて、第三の物(丙)が出來上る。かういふ風に總ての物が正(甲)反(乙)合(丙)の辯證法的展開を爲す可きものだ云々といふヘゲルの哲學的觀念を經濟の上に當てはめたのが、所謂マルキシストの唯物史觀である。だから彼等の言ふところによると、資本主義其物は善かれ悪しかれ自己の體内に包藏するところの矛盾に引きずられつつあるものだ。之を現在の世界的不景氣に就て言へば現在の世界的不景氣は資本主義生産の無政府的狀態から來たもので、資本主義經濟其ものが内藏する矛盾の現はれに過ぎぬ。だから此不景氣を救ふ道は、凡ての生産を社會主義的國家の管理に移すの外はない。即ち總ての生産行爲を個人の利潤から脱離して、一般社會の爲に責任を以て之に當るといふ風に、生産を一般社會の消費を標準としての計畫的統制の下に置かなければ駄目だ。そうしなければ、此世の不景氣や失業問題は永久に片付くものでない。そして此方針を更に一層徹底的に又完全に行ふとすると、生産の國家統制を國際統制にまで擴大して行かねばならぬ云々——といふのが、その大要だ。

現在の各國の資本主義經濟が既に皆一樣に第三期に到達して崩壞の運命にたどり付いたかどうか。資本主義生産には恐慌が免れないものだとしても、之に代る社會主義經濟に於て

果して能く一切の需給の投合を、過不足なく、又殊に誰れしにも不平不満なく、圖り得るものか。どうか。資本主義その物に辯證法的自滅の運命が潜んでゐるものならば、之に次で興るといふ社會主義その物にも亦同じ崩壞の運命が潜んでゐるのではなからうか——少くとも是れ丈けの疑問は次ぎから次ぎへと湧てくる。が然し、今は是等の問題に深入りすることを止め、暫く當面の問題とする世界的不景氣と資本主義の關係につき、少しく吟味を進めやうと思ふ。

資本主義の世の中では、一國內でも又國際間でも、戦争とか、恐慌とか、不景氣とか、大地震その他の天災地變、何んにせよ、兎にも角にも經濟界を動搖せしむるやうな一大事變が起る度に、其國の富資本、事業、勢力の集中が特に其際に於て著しく行はるる。そこで、結局資本主義其物が其機會に乗じて更に一段の發達進歩を見るものだ。それは丁度平い箱の中に粉土を入れて搖ると、搖れる度毎に土が固まつてゆく、搖れ方が大きいほど土の固りやうも大きい、搖れ方が何時までも止まないで續くといふと、遂には一つか二つの大きな塊になる……といふやうなものだ。之を我國の過去の歴史に就て考ても、西南戦争から始つて、日清戦争及その戦後の恐慌、日露戦争及その戦後の恐慌、歐洲大戦争及その戦後大正九年三月の恐慌、大正十二年九月の關東大震災、昭和二年四月の金融恐慌、それから最後に今回の金解禁と世界的不景氣の襲

來と、こういふ風に、我財界を動搖せしめ、又我財界を動亂せしむるところの大きな事件が勃發する度に、都鄙到るところ、大小無數の破産者失職者を續出する一方に、大小無數の成金や富豪が出來上り、又その大小無數の成金や富豪が、それよりも更に一層大なる成金や富豪に壓倒されて、次第にその數を減すると同時に、それらの人々の中にあつた各種の事業と各方面の勢力が、漸次一箇所に集中して、そこに何々王國とか、何々コンツエルンなどいふものを構成する丈の働きを爲したに過ぎぬ結果となり、又なりつつあるのが、今の日本の現状だ。之を諸事業の統制とか、合理化とか名付くるが、實は金融資本の完成に、歩一步を進めつつある状態なのだ。資本主義經濟の豫定の發達なのである。

一一、金融資本の増長と國家

尤も之と同時に、是等の事變に際會する毎に、大きくなり行くものに、今一つ財界に對する國家の支配權の増長なるものがある。日本政府は米が安くなれば米屋もやる。生糸が安ければ生糸の輸出補償法を行ふ。金融恐慌が起れば、特別融通をやる。戰爭を氣構に鐵道の國有もやれば、社會政策上の理由からあらゆる國營もやれば專賣もやる。そこで國家も亦一つの大なる事業家になり、金融資本家たる觀を呈するといふのが、近頃の世相である。此調子で進んでゆくと、遂には國家と二三の金融資本との對立、牽制、争鬭、勝敗とならざるを得ぬ。米國の如

きは動もすれば此争鬭に國家が敗れて、金融資本が完全に政治をも支配する形に歩一歩近附きつつあるやうだ。此形が近世國家にとり最も恐る可き形だ。自然に放任して國家が何等の政策を施さなければ、資本主義經濟其物があく迄も増長するにしても、其間に立て常に之を牽制するところの有力なる國家の權力さへ維持されるれば、一國の富が集中する傾向ある一方に、絶ず之を分散せしむる工夫がある。又生産力(資本家の)増進に反比例して消費力(無産者の)減退を見る場合にも、彼を抑へ是を進むる經濟及財政政策を講じ得る。唯其政策の能不能無力有力如何が、懸て國家其ものの無力有力の程度如何に在るは、改めて言ふ迄もない。

全體から觀れば、先達の歐洲戦争でアメリカが一番の成金國となつた。今の世界にアメリカ程の富裕な國はない。従て又アメリカほど資本主義的生産の隆盛な國はない。それだけに今回の世界的不景氣に際して、アメリカに最も多くの失業者があり、アメリカが最も不景氣だといふ事實は、何を物語るのか。之は歐洲戦争の結果として、アメリカに最も多く世界の富が集つたから、國家間の貧富の懸隔が一段と急進したのみならず、アメリカに集つた富が更に激しい集化を重ねて、結局はアメリカ内で頗る少數の人の手に集つた爲に、而も此勢を統制する中央政府の勢力が如何にも微弱であるが爲に、此國に於ける貧富の懸隔が歐洲戦争以後更に一層大きくなつて、此國內及國際間に於ける生産力と消費力の不調和が更に一層大きくな

つたが爲めではあるまいか。

先頃ドイツの有名な發明家ハーバーを初め各國の科學者がアメリカに會合したとき、其席上で、現今世界は盛なる發明發見の爲に、遂に各方面に激しい生産過剩を來した。又それが爲に世界的不景氣までをも起した。これでは却て世界を不幸に導くことになるから、科學上の發明發見は此際一應打切りにする方がよいではなからうか……といふやうな意見が出たと噂されてゐる。之は事實か否か。若し事實としたら頗る滑稽な事實であるが、アメリカの實況を目撃した人々には、此種の感を深くすることであらう。

以上はアメリカの話であるが世界全體としても亦同じことだ。今回の世界的不景氣の襲來を以て、直に資本主義經濟の行詰だとは速斷し得ないが、歐洲大戰及び其跡始末による國內及國際間の貧富の懸隔の急テンボが唯一無二の原因でないまでも、最も有力な原因であることだけは、否定する譯にゆかぬ。

二、金解禁と正貨流出及物價

昭和五年の我が財界は前代未聞の一大惡化に明け、一大惡化に暮れた。特に此狀態の顯著になつたのは、同年二月末以來のこと、それが五月から十月にかけて、最も激しくなり、人心恟々の中に歳を越すことになつた。事の茲に至つたには數々の遠因がある。決して一朝一夕

の事ではないが、差當つての動機は、金解禁に次ぐ世界的不景氣の襲來であつた。此内世界的不景氣に就ては既に述べた。依て茲に専ら我國に於ける金解禁の影響に就て吟味を重ねる。昭和五年一月十一日を以て斷行したところの金解禁の結果は何であつたか。それは改て言ふまでもなく、

- 一、對外的には、爲替の回復と正貨の流出
- 二、對内的には、通貨の縮少と物價の下落であつた。

金解禁と同時に、我國の對米爲替相場は、四十四弗(預口内閣成立當時の相場)から一躍四十九弗半になつた。即ち一割三分餘の騰貴を見た。爲替相場が騰貴した丈けでなく、同時に爲替相場の變動がなくなつた。そこで我國の輸出入貿易の上に、爲替相場の變動からくる影響も、又爲替相場の變動を目當の投機性も、總て一掃された。然し乍ら、我國は從來輸入超過國であり、又同時に借金國であるところから、金解禁と同時に、正貨の流出が世界的不景氣と相俟つて激しく起つた。即ち昭和五年度の金の流出が三億八百萬圓に達した。尤も此間我國は金の流入及買入に努力したから、日銀の正貨準備の減少は二億四千七百萬圓で、昨年末の正貨保有額は八億二千四百萬圓であつた。又昨年中に我國の會社銀行等が買入た外貨邦債其他が一億圓餘で

あり、正金銀行が昨年中に積出して不用になつた爲替資金が約六千萬圓あるといふから、之を事實と信じて、此の二つを差引くと、昨年中に實際我國の手から喪ひ切つた正金は大したものでない。

次に金解禁の對内的影響は如何であるかといふと、先づ第一に來るものは、通貨の縮少であつた。正貨が流出し正貨準備が減少したからには、勢ひ通貨の縮少を見ねばならぬ。果して兌換券發行額は十三億圓乃至十四億圓であつたものが、十一億圓乃至十二億圓に下つた。これだけならば、所謂通貨の減少も大したことはないのであるが、之と同時に、手形の流通が著しく減少した。全國の手形交換高を見ると、昭和四年の月額が大體五十億圓であつたのに、昭和五年の月額が大體四十億圓で、九月十月十一月には三十七八億圓にまで下つた。之を英米の手形交換高に對比すると、アメリカ一〇、イギリス四、日本〇五である。ワシントン條約の軍縮比率のやうに、五・五・三どころの話じやない。是れだけ激しい通貨の減少を見たのだから、勢ひ物價の下落とならざるを得ぬ。歐洲戰爭前(大正三
年七月)の物價指數(卸賣
相場)を一〇〇として、昭和四年末の我物價は一六三であつたが、それが昭和五年末には一二八に下つた。即ちこの一年間の我國物價下落の割合が二割一分六厘で、アメリカは昨年末の物價指數が一〇九(戦前の
物價を
一〇〇として)で此一年間の物價下落の割合が一割八分六厘、イギリスは昨年末の物價指數が一〇四

(戰前の物價を)で此一年間の物價下落の割合が二割二分である。我國の物價も漸く英米の後を追って戦前の相場に復歸しつゝあると云へる。

一三、低物價政策に對する批判

之に就て一つの議論がある。我國の物價が下落して戦前の相場に近くなり、英米に比べても餘り高くないところまでになつたのは、正しく金解禁の第一の手柄だ。何故に手柄かといふと、物價が斯く下落すると、總ての生産費も亦自から安くなるから、需要が喚起され、生産及輸出の増加になり、貿易の平調が保たれ、茲に經濟界は健全なる回復の道程に上るからだ——とこう云ふ主張が盛に行はれてゐる。

此議論は一通り論旨が立つてゐる。だが、この議論を肯定するに方つて、三つの疑問が起る。それは

- 一、物價が下落すれば、それだけ生産費が安くなるかどうか。
- 二、物價を安くすること以外に、生産費を安くする途がないかどうか。
- 三、英米と同じやうに、戦前の相場まで物價が下落せねば、我國の輸出の増進を望めぬかどうか。

この三つである。生産費を構成する要素は原料だけでない。此外に賃銀地代、利子、機械、器具

等様々のものがある。假りに原料が安くなつたからとて、其他のものも、物價の下落に伴て同時に安くなるであらうか。原料が安くなつた丈けでも、生産費が安くなるではないかといふかも知れぬが、それも亦物によつてその割合に下らぬ場合があり、下るにしても急には行かぬといふ場合もある。それにも拘らず、製品が今日のやうに暴落すると、少くとも或る時期は、經營が益困難になり、輸出が却て不振になる。それも英米等と競争の地位にある製品であるとか半製品であるとか原料品であるならば、英米等と同じ割合のところまで物價の下落するところが、競争力を増加する所以だから、輸出増進の基になるであらうが、我國の全輸出品の幾割が果して英米との競争の地位に立つ物であらうか。之は篤と考へねばならぬことじやないか。又英米等と正當衝當をやつてゐる輸出品であるにしろ、それが英米と同じ割合に戦前の相場に復歸すること自體が、輸出増進の基だとは、如何にしても考へられることではない。一體物が安いとか高いとかいふことは、同じ品質の物だといふことを前提としての話だ。安からう悪くからうでは、實際安いのではない。良い物を造らなければ安くなつてもダメだ。少々高くては良い物ならば賣れる。輸出増進の途は是れ以外にない。金解禁によつて、物價が下落すると、輸出が増進さるゝといふ早や呑み込みの議論は、少々大雑多過ぎる。そして此種の議論は、是迄日本の物價が高か過ぎた爲に、輸入超過が打ち續いたのだから、是非とも物價を國際

水準まで引下げる必要がある、それには金解禁が最も有効な方法だといふ見解が基礎になつてゐるのであるが、此見解も亦前の議論と同様に、物價と貿易の關係をあまり簡單に片附けやうとするものだ。

經濟界全體の上から概言すると、物價は月々少しづつ下つてゆくよりも、少しづつ上つてゆく方が宜い。一番の理想はと云へば、物價が少しも動かぬことだ。物價が上るにしても、下るにしても、動くといふことは、之を喜ぶ人々あると同時に、その反面に、必ずや泣く人々がある。だから一國の政治の要道は常に物價を動かさしめないといふことだ。動くにしても、成る可くその動き方を小さくするといふところに眼を着く可きだ。一國の政治はそれであつても、一國の經濟はその時々々の需要供給の理によつて、物價は上りもし又下りもする。然しその場合には其國の經濟界に投機性が極少くなるから、自から健全なる發達を遂げ得る。

一四、全産業及貿易の一大沈衰

金解禁論者は我國今日の物價下落を以て金解禁の賜だといふ。僅か一箇年の間に二割二分の暴落は、確に金解禁による通貨の縮少に由來するのは論なきところだが、然しそれ丈けが唯一の原因でなくて、金解禁と同時に襲來し來つた世界的不景氣と資金難とに壓迫されての大投賣——元價を切てまでの捨賣——にも由るものではあるまいか。之は昨年中の鐵材、人

造肥料、生糸、綿布等の成行きを見ても明白である。斯様な譯だから、金解禁そのものには非難はない。之は早晚斷行せねばならぬことだが、之が斷行の手柄話に物價の暴落による輸出増進を擧ぐるのには、慎む可きことだと思ふ。又假令ひ物價の暴落によつて輸出が増進されたとしても、輸出貿易だけが日本の經濟の全體ではない。金解禁論者は動もすると日本の貿易のバランスにのみに専念して、他を顧みない傾きあるが、金解禁の結果、輸出が増し輸入が減つて、輸出入のバランスがとれても、全體の貿易高が著しく萎縮したり、又一切の株式、商品總ての財産財物が一齊に慘落して目も當てられぬ状態になつても、尙ほ金解禁の手柄話を高唱するつもりなのであらうか。此點に就て茲に三土忠造氏が此一月の議會に於て試みた演說の一節を引用する。

我國の生産額は、農産額約四十億圓、工産額約七十億圓（當時職工五人以下の工場を除く）水産額約五億圓、林産額約三億圓、鑛産額約四億圓、總計約百二十二億圓である。假りに此内二十二億圓を原料關係で重複するものとして加減しても、約百億圓の純生産額がある。その内輸出さるゝものが約二十億圓（昭和四年内地輸出二十一億三百萬圓）で、純生産額の五分の一に過ぎない。消費節約を文字通りに實行すれば、それによつて困るものは、我國の生産業の五分の四を占むるのだ云々

之は貿易萬能論者に對して、正に頂門の一針と申す可きだ。

此事は不幸にしてその後意外の程度まで事實となつて現はれた。又今も尙ほ引續きて現はれ來りつゝあるのだ。武藤山治氏の議會報告の一節に、左の如きものがある。

昭和五年一箇年の諸物價の値下りを數字で示すと、日本の不動産の總額五百億圓之が、三割の値下りを見て、百五十億圓株式の總額百十二億圓之が四割の値下りを見て、四十四億八千萬圓(註、前此之)東京株式取引所の調査が報告されたが、之によると、昨年中の諸株の拂込高百十五億圓で、平均(註、前後して)三分の一値下りで、其高約四十億圓に達するといふ。彼れ是れの見當は略ぼ一致してゐる。商品の總額が五十五億圓之が三割の値下りを見て十六億五千萬圓、そこで昨年の低物價政策の爲に起つた損害は、合計二百十一億三千萬圓に達してゐる。ところが、世の中に借金といふものがなければ、身代が減つたと云ふ丈で、簡単に濟むが、借金といふものが澤山にある。之は大抵物を擔保として借りて居るものであるが、之が亦大な影響を受けてゐる。全國銀行の貸金が約百億圓之に信託、保險、各地の信用組合等の貸金を合すと、全國で少くとも二百億圓の貸金がある。この擔保品が三割の値下りすると六十億圓四割とすると八十億圓、半分なら百億圓下つたといふ譯で、この値下りの爲に、全國の貸借關係に一大動搖を起してゐる云々

昨年は近年稀なる豊作であつたが、米價が暴落して、東京深川中米の平均相場が、昭和四年度二十九圓、五年度二十七圓、本年一月には之が十七圓(關西では平均十六圓餘)となつた。そこで内地に於ける米の生産總額を金高に換算すると、昭和四年度二十三億五千萬圓、昭和五年度十五億八千五百萬圓、本年は十一億三千六百萬圓にしかならぬ。米と相並で農家の主産物たる繭は更に一

層の暴落だ。昭和四年の春蠶は一貫目七圓五十七錢であつたが、昭和五年の平均は三圓七十五錢、夏秋蠶は昭和四年の平均が一貫目六圓五十錢であつたが、昭和五年の平均が唯の二圓といふ譯だから、繭の生産總額を金額で現はすと、昭和四年には其高六億五千五百萬圓であつたのに、昭和五年には三億圓といふ半分以下に減つた。現在の米の生産費は、農林省の報告が全國平均二十一圓三十五錢、帝國農會の報告が二十六圓四十錢、何れにしても、今日の米の相場では、生産費を割ること五圓乃至十圓にも上るのだ。繭に於ては恐く是れ以上のことであらう。之では全國の農家が到底立ち行かぬ。そこで近年農家の負債が恐しく増加してきた。本年二月町田農相の議會に於ける報告によると、全國農家の負債總額約四十億圓乃至五十億圓、一戸平均七十八圓だといふ。全國農家の借金が四五十億圓にも達してゐるのに、その収入は十五六億圓に減つてゐる。之では借金の返済どころか、月々の利拂も納税も、出來兼ねる。今より二年前には三石四斗の米を賣れば、百圓の借金を返し得たものが、今日では六石二斗の米を賣らねば、同じ高の借金を返せぬ。借金の高が増さないにしても、借金の重さが著しく加つた譯だ。之では地方農村の將來が誠に寒心に堪えぬ。現に其一端が小學教員俸給不支拂事件の續發となつて現はれて來た。田中文相が此二月の議會で答辯したところによると、俸給不拂の町村が全國で既に二百餘に上つたといふ。然し事實はそれ以上で、其後全國聯合教育會

調査によると、既に報告に接した三十の府縣だけでも、之が五百八十餘の町村に上つた。總ての報告が集まると、恐く全國に一千以上の小學教員俸給不拂の町村があらうと云はれてゐる。而もその不拂は一箇月や二箇月のことでなく、既に數箇月以上引續いてゐるものが多々あるといふことだ。

此種の事は獨り百姓だけでない。諸會社銀行その他の商工業者に於ても亦同じだ。大正九年三月の恐慌以來持越の内部の缺陷、大正十二年九月の關東大震災の打撃、昭和二年四月の金融恐慌の痛手等、既に度々の大事件に遭遇して、此上彌縫し難きまでになつてゐたものが、復又今回世界的大不景氣の襲來を受けたのだ。その經營の困難推して知る可きものがある。就中その苦痛の稍一般性を帶てきたものは、固定資本(借金)の重荷が著しく加つたことだ。一流の紡績會社以外は皆是れだと言つても、あまり過言ではあるまい。巨額の借金に苦んでゐる我中央政府及地方自治體の縮圖を全國到る處の大小の會社工場に見るといふのが、正に我國の現状だ。産業合理化の噂に上つてゐる全國十四社の製鐵會社の資本金が合計二億五千七百萬圓で、其社債借入金が又合計二億四千萬圓だといふことは、決して製鐵業のみの現象ではない。斯くの如くして唯さへ過大の債務過大の固定資本に苦んでゐる諸企業が、金解禁による貨幣價值の騰貴によつて、更に幾割か重荷を加へたのだから、決して尋常一樣の苦痛では

あるまじ。

次に貿易を觀る。昭和五年の輸出入は各國何れも前年に比して著しい減少だが、就中我國が最も著しい減少だ。輸入に於て約三割、輸出に於て約三割二分の減少だ。輸入に於てアメリカが三割の減少を示してゐる以外は、各國孰れも我國ほどのことがない。

昭和五年		四年		四年に對する 減退率	
日 本	入	百萬圓 一、六八〇	二、三八八	パーセント 二九・六	
	出	一、五一八	二、二一七	三〇・五	
ア メ リ カ	入	百萬ドル 三、〇六〇	四、三九八	パーセント 三〇・四	
	出	三、八四〇	五、二四二	二六・六	
イ ギ リ ス	入	百萬ポンド 一、〇四五	一、二二一	パーセント 二一・四	
	出	六五八	八三九	一四・六	
フ ラ ン ス	入	百萬フラン 五二、三四四	五八、二二〇	パーセント 一〇・一	
	出	四二、八二九	五〇、一三九	一四・六	
超	入	九、五一四	八、〇八一	一七・七	
	出				

日本及世界經濟の現勢

	百萬マーク	パーセント
輸入	一〇、三九二	二五・〇
輸出	一一、〇三五	一一・〇
超	一、六四二	不明

然らば本年に入つて如何がといふと、昨年及一昨年に比べて少額乍らも輸入超過の漸減を示してゐるとはいへ、全體の額に於ては、輸出入共に更に一層激しい萎縮を示しつつある。此先き之がどうなるか、頗る寒心に堪えない。一體、我國の貿易が頻年入超を續けることも心配の種子であるが、貿易全體の高が甚だ振はないことも亦嘆しいことなのだ。是迄の成績からいふと人口一人當りの貿易高が、大體アメリカの百五十圓、イギリスの四百五十圓、フランス及ドイツの二百圓に比べて、我國は僅に六十圓なのだ。

然らば、我財界は今日に於て既に不振の底を突き、今後は漸次回復するであらうか、或は又現時の安定は一時的で、今後一層悪化するであらうか。これは一般國民にとつて重大問題である。この點に關し政府當局は昨年八、九月頃のわが財界が不安の極度に達したもので、その後各方面で不景氣に處する對策が講ぜられ、またインドおよび支那の動亂も治まり、商品中には生産制限、販賣協定によつて價格の騰貴したのもあつて、十一月頃から財界の不安は漸次除去されたから、わが經濟界も極端な不安時代は既に經過し、今後は徐々堅實な歩調で回復し行

く傾向が各方面に現はれて來たと述べてゐる。之に反對する者は、これ等の現象はすべて一時的であり、かつ政府の探つた人爲的彌縫策の結果に過ぎぬ、前途に何等轉換の曙光が見えないのみでなく、却つて一層不景氣となる原因が醸成されつゝあると駁してゐる。之は總て此後の見込であるから、水掛論と云へば水掛論に相違ない。然し乍ら政府當局者が今回の不景氣を以て世界的不景氣に由來すると断定してゐる以上、そして又それが唯一でなくとも、主たる原因であるからには、世界的不景氣そのものが一向變つてこない現狀に於て、しかく樂觀することが適當であるかどうか、頗る疑問と謂はねばならぬ。

一五、財政難と政策動搖の危険

それは兎に角として金解禁及世界的不景氣の祟りを受くるものは、不幸にして民間のみではなかつた。中央政府及地方自治體何れもが皆この一大突風の激しい打撃を受くるに至つた。

政府は昭和四年度の中央財政に於て約一億四千六百萬圓、地方財政に於て約二億七千萬圓、合計四億二千萬圓を、又昭和五年度中央財政に於て約二億五千五百萬圓、地方財政に於て約二億五千八百萬圓、合計五億一千三百萬圓を節約した。又昭和六年度豫算に至つては、總額十四億四千八百萬圓であつて、之を昭和四年度豫算に比すれば三億二千萬圓之を昭和五年實行豫

算に比すれば更に一億六千萬圓の緊縮になつてゐる。之は緊縮内閣として正に當然の事ではあるが、茲まで經費節約財政緊縮するに至ると、次からくと問題が生じてくる。

第一、緊縮の實を示すに急なる結果、爲す可き仕事をも爲さないで、唯無暗に繰延と節約のみ事とするのではあるまいか。

第二、節約するとすれば、不生産的なる軍事費——殊に陸軍費——及一般行政費に一大斧を加ふ可きであるのに、それを爲し得ないで、其穴埋に生産的方面に無暗な節約を加ふるのではあるまいか。

第三、世界的不景氣に加ふるに、この如き緊縮政策を以てしては、地方農村の疲弊、都會商工業の沈衰によつて、中央又地方政府の歳入が著しく減少する。そこで現政府の緊縮政策も初ての内こそ自發的のものであつたであらうが、その後の緊縮は歳入の著しい減少又は不足に辻褄を合す爲めの緊縮となるのではあるまいか。

第四、それも終始首尾よく辻褄を合さるれば宜いが、此不景氣の續く限り、追々歳入が豫定以上に減少するから、實行豫算の組み更へを幾度もやらねばならぬことになりはすまいか。斯様の場合には、政府當局者としては、租税を初め諸収入をかなり内輪に見積る可きであるのに、それが寧ろ反對で、本年度の豫算の如き、既に餘程の歳入見積過大が含まれてゐるやうに見

ゆるが、どうか。

第五、政府は緊縮政策を標榜すると同時に、非募債主義を標榜した。それにも拘らず、其後地方債は下シ、許可するのみか、昭和六年度に於ける特別會計の内の五千六百六十萬圓の公債發行は既定計畫の分だから致方ないとして、新に鐵道改良費千二百萬圓、追加豫算として一般會計二千二百萬圓、樺太廳特別會計百五十萬圓、合計三千五百五十萬圓を失業救済公債として發行することになつたものだから、大分議論の種子になつた。然し之れ丈では、現政府が遂に非募債主義を破つたといふ非難は當らぬが、既に國庫剩餘金は全く盡き、一時の事とは云ふものゝ大藏省證券を極度（一億五千萬圓）まで發行したり、減債基金基金に繰入るる筈のドイツ賠償金を一般の財源に廻したり、又現に此春の議會閉會後間もなく震災善後公債五千萬圓近くのものゝ發行して、赤字を埋めたりしてゐる手元を見ると、此先き財政のにやり繰りが附かないで、遂に非募債主義を破壊することになりはしないであらうか。

第六、軍縮條約の結果生れた五億八百萬圓の剩餘財源の内、三億七千四百萬圓は海軍補充計畫として昭和六年から六箇年（即ち昭和十一年度まで）の繼續事業として支出する、残りの一億三千四百萬圓を同し六箇年間の減税に充當するといふことになつたが、之れとて確乎たる財源ある譯でなく、此後これ丈けの收入ありとしての紙上の割當に過ぎないのに、此度の議會で、更に其

途中の昭和九年度から首を出す第二次海軍補充計畫總額一億四千萬圓なるものあることが暴露した。これでは軍縮の剩餘財源を目當ての減税が全く意味を爲さなくなりはしないか。又假りにそれは宜いとしても、第一及第二補充計畫は果して豫定の如くに遂行し得るかどうか。それを遂行するとすれば、此後の財政はいよゝゝ行き詰りとなるのではあるまいか。

第七、こうなると、不景氣による歳入の減少、それに基く豫算の實行難ある一方に、既定計畫による海軍補充計畫の割込と減税の實行で緊縮政策を標榜した政府は掲げた看板の爲めの自縛自縛で、遂に行き詰りとなつて、内閣の瓦壊を招くのではあるまいか。

第八、内閣の更迭も宜い。政策の變更必ずしも悪くはない。然し乍ら新内閣出現の結果として、

(1) 再び金の輸出を禁止して新平價による解禁を斷行するに至ることはないか。

假令ひ政友會内閣となつても、そんな亂暴狼籍はやらない、又決してやり得ないものと安心するにしても、

(2) 財政上では非募債主義が再び募債主義——即ち借金政策——に代り、經濟上では消極政策が積極政策に代つて、政友會の所謂不況對策たる五箇年計畫の積極的産業立國策なるものに移りはしないか。

之れ丈けは殆ど必至の事と覺悟せねばならぬか、それが果して我國狀に照し善いことであるかどうか。

一六、政局不安に基く財界不安

目下の政況から前途を見透すと、少くとも以上述べた八つの疑問反問が次きから次へと起つてくる。此内最後の問題が一番厄介だ。我々は金解禁に就ても不満がある。然し之は何れの内閣かによつて早晚やらねばならぬ事であり、又既にやつた事であるからには、之を再びやり直すのは、斷じて不可である。緊縮政策にしても亦同様で、その緊縮の質と量に於て少からぬ不満はあるが、放漫政策や借金政策を繰返すよりも遙に歓迎す可きものであることは疑を容れぬ。其譯は最初に既に説明してゐるから、茲に之を再びせぬが、既に行き詰つたる我國の財政及經濟を根本から立て直すには、一と先づ思ひ切つた整理をせねばならぬことは、世界的不景氣に遭遇せずとも避く可からざるところだ。勿論其整理の方法と程度に於て未だ充分ならざるところ——陸軍費の大刪減及一般の行政整理と人件費等の大節約の如きもの——あるが爲めに、一般の豫算の上に無理が起り、それが將來内閣の基礎を危くするのであるが、さりとて此儘にして緊縮内閣が倒れることになる、折角の整理も皆中途半端のものになり、何等刷新の實が擧らなくなる。之は直接政黨政派に何等關係ないところの——従て政權の

爭奪に全然無關心なるところの多數の國民にとり、寔に遺憾千萬だと謂はねばならぬ。

惟ふに、國家の整理も、會社の整理も、事に大小の別こそあれ、道理に二つはない。弱體の國家は弱體の會社と等しく、一日も早く思ひ切つた整理を斷行せねば、立て直る筈がない。借金をしては事業を擴張したり、利益を胡魔化しては配當を續けたり、株價を釣り上げて景氣を附けたりしても、それは到底永く續くものではない。その遣り法が是迄幾多の會社銀行をポロ會社ポロ銀行にした。然し同じ調子で日本の國家をポロ國家にすることだけは如何にしても御免を蒙らねばならぬ。

最初に述べたやうに、歐洲大戰後の我國は、戦時の好景氣に浮かれて、戦後も尙ほ永く暴飲暴食をやつた爲に、遂に劇しい悪性の腸カタルに罹つた。之を治すのには、一日も早く適度の下劑をかけて、腸の中の汚物を一掃すると同時に、暫らく絶食して腸の働きを回復させるといふことの外に療法がない。此療治の間は、國民の誰れも彼れも頗る辛いに相違ない。然し之を辛抱せなければ到底其健康を回復することが出来ぬ。それなのに、この治療半ばに主治醫を代へたり、療法を改めたりして、滋養物だからといふて、復無暗に食つたり飲んだりしたならば此大病人はいよゝゝ大勢の醫者の玩具になり、へとゝになつて、遂に不治の病體に陥る外はない。之は此際最も慎まねばならぬことではあるまいか。尤も現在の主治醫に於ても、其

療法に徹底しないところがある。又絶食も宜いが、人間は生き物であるから、朝夕多少の消化物や、適度の滋養物を與へなければ、却て病氣の回復が遅い。それもまた宜いが、極端に瘠せ衰へさしてしもうたならば、一寸としたことから、衰弱し切つた病體の或る局部(永らくの失業に悩み切つた無産階級の一部)に、急性肺炎(意外な出來事)などを併發して、取り返しの附かぬことになる。現政府の對症療法には、やゝ此感を深くする。物には程度がある。政治は生き物だ。生き物を取り使ふには、生きた調子を心得ねばならぬ。